

未来バンク

すべての人がおカネに意志を持たせる社会にする

ニュースレター 第4号 2020 JUN

【コンテンツ】

1. 田中 優
2. 木村 瑞穂
3. 融資先レポート 株式会社サスティナライフ森の家（宮城）
（2020年2月融資）

田中 優 理事長

Tanaka Yū



「わかめ、めかぶ、昆布」など 海藻類を食べて、 コロナに対抗しよう

私はもちろん医療関係者ではないし、これといって特別な知識があるわけでもない。しかしその問題が降りかかってきて、毎日のニュースや気にかかる情報を自分なりに考えてきた。

もちろんそんな私の発言に対し、「シロウトのトンデモ説」だという批判があることも知っている。しかしそれでもなお、他人事にして無視するのではなく、自分なりの対策を考えていきたいし、シロウトだからと考えずにいることは嫌だった。

何が役立つのだろう。それが薬やワクチンであれば、時間がかかるにしても誰か専門家が考えよう。しかし私としてはワクチンに頼るのは嫌だし、できる限り自然の中から解決策を見出したかった。

ワクチンはそれを保管するための防腐剤や殺菌剤が必要になるし、薬はアビガンに催奇性(奇形を生み出すこと)があるように、何かしらの副作用を耐えなければならない。その点食べ物、長年の間人々が食べてきているのだから安全性は立証済みだし、余分なものを添加しなくても大丈夫だ。

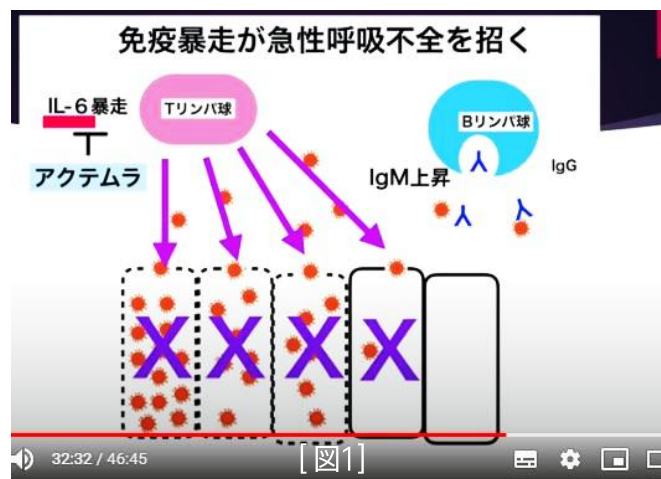
そうしたものから考え続けることにした。そこで今思いつく中からの解決策を見ておきたい。偶然「天然住宅」のお客様の中から、「優さんはどう考えているのか知りたい」という声が届いてきた。誠にありがたい言葉だと思い、これを書いてみることにした。

まず病気の本体だが、ウイルスによって感染するもので、呼吸器系と、胃液を乗り越えられないはずの消化器系にも感染する。呼吸器系では呼吸器の浅い部分の気管を超えて、肺の奥まで到達して重病化する。

しかも重篤化させるものの多くはウイルス本体によるものではなく、そのウイルスに対抗しようとした免疫(主にIL-6=インターロイキン6)の過剰分泌によって引き起こされている。「サイトカインストーム」と呼ばれるものだ。

「アクテムラ」という薬剤の点滴によりウイルスの増殖を抑制すると共に、「サイトカインストーム」を抑制できる。

この「サイトカインストーム」は、傷つけられた血管を修復するために血栓を作り出す。そのため、もともと弱い血管に大量の血液を流すことが必要な状態にある「高血圧」や「循環器系疾患の予備軍」の人たちには、致死的な病変をもたらす。ウイルスを抹殺するために、ウイルスに感染した細胞そのものを抹殺するからだ（図1）。



重症化の原因は、ウイルス自体による被害ではなく、「サイトカインストーム」と呼ばれる自己免疫の暴走なのだ。

これは自己免疫疾患だから、同じく自己免疫疾患である関節リウマチの薬品である「トシリズマブ」などに非常に大きな改善例が見られ、中国およびイタリアにおいてCOVID-19の治療薬として推奨されている。

「アクテムラ」もまた同様の効果を持つ。このように「インターロイキン6(IL-6)」による「サイトカインストーム」を免れる方法も存在する。消化器系の病変にも同じ機序が起きていると思われる。従ってこれにも同様に効果があるものと見られている。

この「サイトカインストーム」に対してはもう一つ、「制御性T細胞」(Tレグ)が大きな作用を持っている。そもそも「T細胞」というのは「Thymus（胸腺）」の頭文字をとってそう呼ばれている。ここでは「サイトカインストーム」のような免疫の爆発的な発生と、それを抑制する「制御性T細胞」とが拮抗して成り立っている。

その爆発的な免疫機構の発生を抑制する機能として、「Tレグ」の存在が大切だ。その「Tレグ」というのは、一体何なのか。

全く驚くべきことに、それは腸内細菌の一つ、一部には病原性を持ったものもある「クロストリジウム菌」が、腸内に流れ込んできた「水溶性食物繊維」を分解したときに生み出すものだった。その菌

は「酪酸菌」の一種で、臭いの良くない「酪酸」の一種だった。

これは日本人には馴染みのある菌で、海産物など水溶性食物繊維をよく食べて消化してきた人たちにはよく発達しているもので、日本人と海洋沿岸のわずかな国の人たちだけが持つようだ。日本人だけが「海苔を消化できる」というのは有名な話で、食べ物と共生して腸内細菌が発達してきたのだ。しかもさらに昆布の生産量は北国の北海道周辺だというのに、昆布の消費量が最も多いのは沖縄であったりする。これは日本国内で「北前船」というような、国内を流通する不思議な物流の発達によってもたらされた。

今回の新型コロナウイルス問題で、東アジアの沿岸部では、他国と比べて非常に死者数が少ない。（図2）

東アジアは百万人当たり死亡数が少ない					
	感染者	昨日の感染者	死者	昨日の死者	人口百万人 当り死亡者
USA	1,430,348	+21,712	85,197	+1,772	257
Spain	271,095	+1,575	27,104	+184	580
Russia	242,271	+10,028	2,212	+96	15
UK	229,705	+3,242	33,186	+494	489
China	82,926	+7	4,633		3
Japan	16,049	+81	678	+21	5
S. Korea	10,962	+26	259	+1	5
Taiwan	440		7		0.3

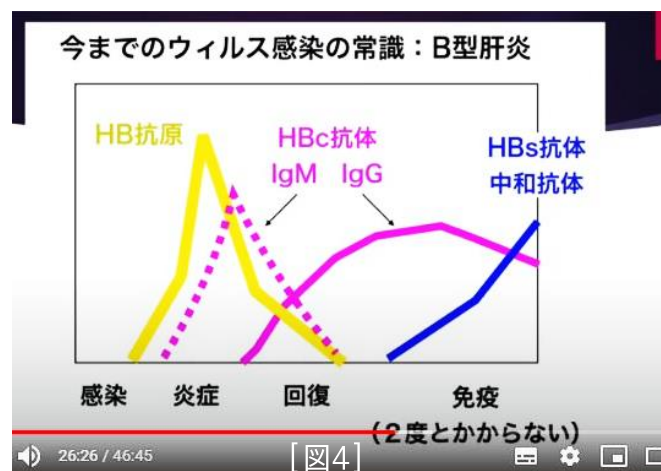
それはこの海産物からの「水溶性食物繊維」を食べるという文化が、日本全体に広がっていたことと無関係ではないと思う。それによって免疫を調整する「Tレグ」が機能していて、人々の免疫機能を整えていたのだと思う。

そして「液性免疫」の獲得免疫の場合には、最初に「免疫グロブリンM」(免疫グロブリンとは血液や体液中にある抗体としての機能と構造を持つ蛋白質の総称で、G、A、M、D、Eの5種類がある)がある（図3）。

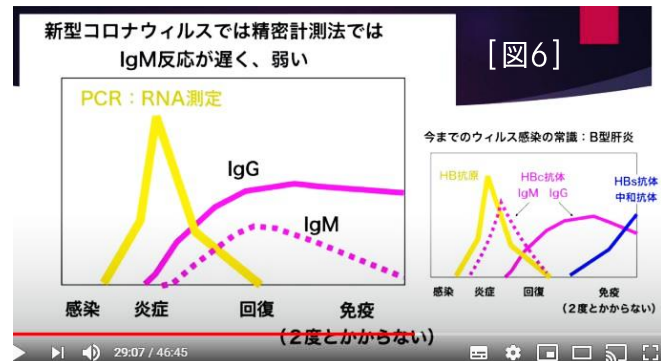
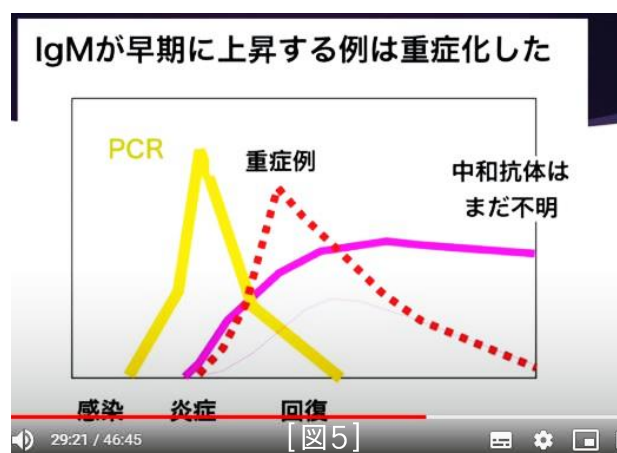
- I g G 5種類の免疫グロブリンのうち血中にもっとも多量に存在しています。侵入してきた病原体やウイルスの抗原と結合して、白血球の働きを助けたり、ウイルスや細菌が出す毒素と結合して無毒化します。
- I g A 喉の表面、腸の内側、気管支の内側の壁などの粘膜の表面に存在し、侵入してきた病原菌やウイルスなどの侵入を防ぐ働きに関与しています。
- I g M 感染した時に初期段階で産生される抗体です。補体という蛋白質と共同して病原菌やウイルスなどの抗原を破壊したり、白血球がこれらを食べるのを助けます。
- I g D リンパ球の成熟、分裂になんらかの役割を果たしているものと考えられていますが、今のところまだよくわかっていません。
- I g E 免疫グロブリンとしては最も量が少なく、アレルギー反応に主要な役割を果たしており、アレルギー性疾患、寄生虫感染症などで増加します。

【図3】

その獲得免疫の「免疫グロブリン」は、通常、先に「免疫グロブリンM」が活動し、次に「免疫グロブリンG」が活動する、それを「B型肝炎」で示すと常識的に(図4)のようになっていた。これが標準的な免疫活動の順序だ。

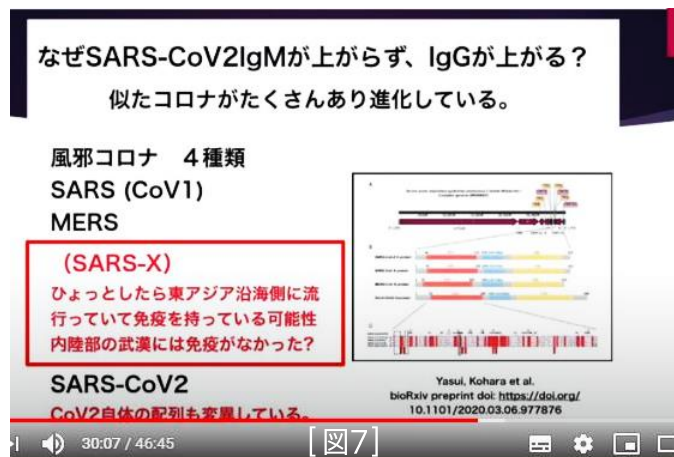


ところが今回の新型コロナウイルスでは、免疫グロブリンの発生の順序が異なっている(図5)。そして「免疫グロブリン(IgM)」が非常に早い時点で活性化した場合に重症化した。最初から「免疫グロブリン(IgG)」が活性化した場合は重症化しなかった(図6)。



つまり、通常の「IgM」が活性化したのは、そのウイルスが生体にとって初めて出会うものであって、「IgG」の活性化は、体がそのウイルスを知っていたと考えられる。少なくない日本人は、今回の「新型コロナウイルス」に遭遇する前に、先に同じようなウイルスに遭遇していて、「IgM」の活動をスキップして、よりウイルスに特化した「IgG」に進んだのではないかと考えられる。同じ「コロナウイルス」の一部で

ある「インフルエンザ」の一種を経験していたか、中国でSARS(重症急性呼吸器症候群)が広まった時に、日本に重症化せずに広まっていた可能性がある。これを同じコロナの一種として「コロナX」と書くとする、辻褄が合うのだ(図7)。



そして私は以上のようなことから、新型コロナウイルス対策としては、PCR検査すら十分に行わず、対策は後手後手で、感染がおとなしくなった頃にやっと「緊急事態宣言」をし、「三密対策」ばかり言ってマスク二枚しか配らなかった国なのに、気づいてみると死者数の被害の少ない国であったことになったのだと思う。政府のだらしなさが目立ち、それでも被害が少なかったのは、日本人が優れた食文化を保持していたことと、真面目な国民性が、不足しているはずのマスクをつけ、過剰な接触をせずに外出などを「自粛」したおかげであると思う。

しかしいささか過剰になってしまった。「自粛」を正義の御旗にして、他人にまで強制しだした時には戦時中の人々のような薄気味悪さを感じた。

元の社会に戻そう。気を付けるべきは「三密」で閉じこもることではなく、毎日の食生活に気を付けることが第一だ。次に一皿の食事を分け合うような会食をやめることだと思う。隔離が必要になるのは「既往症」を持つ人と、ウイルスに対する免疫抗体を持たない人たちだ。人々に望むのは「きちんと理屈に合った食生活をして、自己免疫を強めること」だ。再び再流行したとしても、「隔離」を中心にして人々を閉じ込めさせて閉塞させるのではなく、開放的で合理的な仕組みで対策すべきだと思う。

特に不合理な社会の仕組みに迎合すべきではなく、一人一人からの発信で社会を合理的なものにすべきであると思う。これからは、いろいろな意見と事実を積み上げ、話し合いながら社会を良い方向に進めていきたい。

まずは「Tレグ」を多く作るために、「わかめ、めかぶ、昆布」など海藻類を食べてほしい。

(特にデータの多くは児玉龍彦さんの意見を参考にした。謹んでお礼を言いたい)
デモクラシータイムズ動画 https://www.youtube.com/watch?v=8crwEQN_DbA



新型コロナウイルス 金融で起きたこと、タイで起きたこと

中国で新たな病気が流行っているという情報は正月早々からネットでは流れていたが、こんな大事件になるとは想像もつかなかった。想像を超える事態が、予測できない速度で進んでいる。私は現在タイに住んでいるが、異国の地でこのような大事件に遭遇することになるとは思っていなかった。

今後の進展も全く予断を許さないが、新型コロナウイルスを巡って、金融で起きたこと、タイで起きたこと、タイから見た欧米と日本、という観点で少し書いてみたい。なお、本稿は2020年4月13日時点のものである。ニュースレターが配信される頃には事態は大きく変わっていると思われるが、ご容赦いただきたい。

■コロナショック第一弾

コロナショックが起こる前から明らかにバブル状態にあった。昨年9月以降の一直線の上昇は明らかに異常で、マーケットは調整する理由を探していた。そんな時に起きたのが中国武漢での大規模感染であった。株式市場は売り一食になったが、下落幅は1割程度。調整幅としては手頃な水準だった。その後は、じわじわと買いが入っていった。

■キャッシュ・イズ・キング(パート1)

そんな時に起きたのが、欧米での感染拡大である。他人事だった新型コロナウイルスが自分の身に降りかかり、欧米の投資家はパニックになった。株式史上最大の値下げ幅を連日のように更新した。

この時起きたのが、キャッシュ・イズ・キング(パート1)である。あまりにも下落幅が大きかったため、信用取引の投資家にマージンコールがかかった。借金で株を買っていた投資家が借金返済を迫られ、返済のために投げ売りをしなければならなくなったのだ。売りが売りを呼び、投資家はキャッシュ(現金)確保のために資産を売りまくった。金融ショックの時には強いはずのゴールドまでが大きく売られた。

有事に強いと言われる円が買われ、1ドル101円台まで進んだ。市場では1ドル95円台まで行くだ

ろうと言われた。株式市場の下落幅は3割程度だった。

■キャッシュ・イズ・キング(パート2)

投資家が目先の借金の返済に目処をつけると、株式市場には少しずつお金が戻り始めた。都市封鎖は拡大し、経済活動の停滞の長期化が懸念されるようになった。個人は消費を控え、事業家はキャッシュの確保に奔走し始めた。世界中の国家や企業が国際決済通貨であるドルを集め始めた。

ドル円の為替レートは反転し、112円の目前まで迫った。為替レートはその後落ち着いて現在は108円前後で推移している。株価は半値戻しで、15%程度の下落水準で落ち着いている。

証券会社の新規口座開設が増えている。株式の大幅な下落を受けて新規参入する人が多いのだろう。下がったタイミングで買うことは必ずしも悪いことではないが、生活資金を十分確保した上で、余裕資金を投資しなければならない。

■キャッシュ・イズ・キング(パート3)

欧米の感染拡大はピークに達しつつあるが、収束の目処はついていない。経済活動の停滞がいつまで続くのか、世界中の消費者、事業家は不安をいただき、キャッシュを溜め込もうとしている。消費は停滞し、事業家の売上も停滞している。政府は資金繰り対策としてお金は貸してくれるが、損失を補填してくれるわけではない。経済活動の停滞が長期化すれば、破綻する企業も増えてくるだろう。破綻が増えれば、金融機関も破綻するかもしれない。アメリカでは銃が売れまくっている。不気味な前兆だ。

■コロナ保険

タイではコロナ保険が複数の会社から販売されていた。目一杯加入して、わざと新型コロナウイルスにかかろうとする人が続々と登場した。感染しそうな場所を探しては彷徨していたそう。保険はすぐに販売停止となったが、ある意味では平和な時期だった。「加油中国(中国頑張れ)」という垂れ幕もよく見かけた。

■タイでも感染者が増え始めた

3月上旬、欧米の感染拡大に少し遅れてタイでも感染者が増え始めた。

現役閣僚が、「汚い白人には近づくな」と発言した頃から事態は緊迫し始めた。外国紙幣には触れたくないということで、銀行が両替を停止した。私も慌てて日本円をタイバーツに交換した。これもキャッシュ・イズ・キングである。

日本からの帰国者は14日間の隔離が要請されるようになった。帰国して14日経たない日本人が怪我で病院に行ったが、治療を拒否された。

マスクは品薄状態が続いているが、トイレットペーパーなどの生活用品が品薄になることはなかった。タイ人はトイレに備え付けられたホースで洗い、トイレットペーパーは水を拭き取るだけ。トイレットペーパーに対する深刻度は日本人とは全く異なる。

■緊急事態宣言

緊急事態宣言が発令された。矢継ぎ早に個別の命令が出され、状況の把握は困難だったが、取り敢えず家でじっとしていた。

飲食店は閉鎖、ショッピングモール、床屋・美容室も閉鎖、学校も閉鎖。人がたくさん集まるところ、人と人が密に接するところはすべて閉鎖された。ただし、食事のテイクアウトは認められた。もともとタイ人は家で料理を作ることは少なく、テイクアウトで済ますことが多いので、大きな混乱は起きなかった。

深夜の時間帯は外出禁止となり、コンビニも深夜は営業停止となった。飛行機は国内線・国際線ともにほとんど停止。県をまたぐ移動は禁止された。国際郵便も止まった。

タイに住む日本人は毎年4月には一時帰国する人が多いが、今年は帰国を諦めた人も多い。逆にタイに見切りをつけて日本に帰国する人も少なかった。一度日本に帰ったらいつタイに戻るか目処がつかないからだ。空港まで行ってから便が欠航になったことを知り、帰国を諦めた人もいる。

一番困ったのは病院の入口での検温だ。熱があると病院入れてもらえない。怖くてカゼもひけない。毎日の手洗いとうがい、十分な睡眠で用心するしかない。

タイの正月は毎年4月で、盛大に水を掛け合うのだが、今年は正月のイベントはすべてキャンセルされた。

ただし、昼間の時間帯は意外と穏やかである。空いている店がいつもより少ないことと、車がいっつもより少ない点を除けばさほど変化は感じられない。散歩をする上では不便は感じない。

■タイ人のたくましさ

タイでもマスクは品薄だ。使い捨てマスクやN95の精度の高いマスクは全く見かけなくなった。大きな薬屋ではマスクは売っていない。

しかし、布マスクであれば簡単に手に入る。閉店を余儀なくされた人たちがマスクづくりに励んでいるからだ。私が住んでいるアパートには、1階に美容室がある。緊急事態宣言発令後は、美容室にミシンを置いてマスクづくりを始めた。仮に売り切れていても頼めばすぐに作ってくれる。大きな安心感になっている。

■タイ人の優しさ

緊急事態宣言発令後、お寺などで弁当を配布するのを見かけるようになった。私ももらって食べてみたが、どうも様子がおかしい。並んで弁当をもらっているのは、ホームレスと思いき人達ばかりだ。私の着ている服もホームレスのようなもので、弁当をくれたのかもしれない。気づいてからはさすがに弁当をもらうのを止めた。

■タイから見た欧米

タイを訪れる観光客は、中国人、韓国人、日本人が増えてきているが、白人の合計にはかなわない。やはり欧米の力は強大だ。

かつて世界を制覇した欧州、現在の最強国家アメリカが、かくも脆く崩壊していく様は異様に映った。汚い白人には近づくなというタイ人の発言には、白人に対する潜在的な反感が顕在化したものかもしれない。また、欧米でのアジア人に対する差別も顕在化しているという話も聞く。日頃人権外交を強烈に進める欧米も潜在的には差別意識を持っているのだろう。欧米の「先進的な」文化も所詮その程度のものなのだろう。

■タイから見た日本

日本でもやっと緊急事態宣言が発令されたが、危機意識の欠けた「平和」な国に見える。世界で大騒ぎしているのに、日本だけが別世界のようだ。

閣僚も官僚も、国会の予算審議に縛られて十分に動けない。安倍首相が2月末に学校閉鎖の要請を出し、やっと本気を出し始めたように見えたのは偶然ではない。衆議院の予算審議を終えたからだ。予算委員会は連日開かれ、野党議員からの山のような質問対応で官僚は連日徹夜が続く。閣僚も予算委員会对応に目一杯縛られる。

次の節目は、3月末、参議院の予算審議が終えると、オリンピックの延期問題に着手し、それが終わってからやっと緊急事態宣言と補正予算の準備が始まる。参議院での本予算の審議が終わらないと、コロナ緊急対策の補正予算の議論ができないというのは、危機感の欠如以外の何物でもない。官僚には過去の慣習を変えられないのだ。

■遅い、遅い、遅い、でも・・・

何をやっても遅い。感染拡大を防ぐためにはリモート診療を認めて、病院での感染を防ぐことが必要だ。しかし、厚生官僚は頑として認めない。やっと4月の中旬になってから期間限定で認めることになった。

リモート勤務をやれとはいっても、上司の印鑑が必要だったり、紙の書類でなければ作業ができなかったり、そもそも労働時間はどうやって管理するの？、という疑問がいっぱい湧いてくる。これまで業務改革をサポートしてきたツケなのだが、今回は追い込まれた企業も少しずつ改革を始めている。

これまでは言い訳をつけながら先送りしてきた改革が少しずつだが動き始めている。IT化の流れも、リモート勤務も、一度経験すれば、そのメリットを体感して後戻りできなくなるはずだ。この機会に一気に進めば大きな前進になるのではないだろうか。

■生活困窮者対策

生活困窮者対策は各国で進められている。タイでは、3月26日に発表すると、3月28日にネットでの受付が始まった。3日間で2700万人(人口の約4割)が申請した。約3分の1は審査を終え、4月8日に初回の振込を行った。日本では考えられないような迅速な対応である。

日本では未だに本格的な議論が始まっていない。所得制限をかけるという発想自体は悪いとは思わないが、実務はどうするのだろうか。いちいち手作業で審査なんかしていたら間に合うとは思えない。

タイには国民ID番号があって、すべての情報が国民ID番号で集約されている。そのため迅速な事務処理が可能なのだ。ある程度大きな国で国民ID番号がないのは恐らく日本だけだろう。難産の末誕生したマイナンバーも大きな制約を課せられ、その利用はなかなか広がっていない。

マスコミによる強烈なキャンペーンの影響もあるのだろうが、最終的に選択したのは国民である。日本の行政システムは恐ろしく非効率にできている。今回のような有事にはまともに機能しないのだ。

■地方自治

タイには自治体がない。そうすると驚かれる方も多だろう。だからタイは遅れているという人もいるかもしれない。タイでは県知事は内務省の役人のポストだし、地方に設置された役所はすべて国の組織だ。日本も戦前はそうだったし、アジアの国はいまでも自治体のないところが多いだろう。

自治体がなくても何も困らない。むしろ行政効率はその方が高い。日本の自治体はアメリカを手本として戦後導入されたものだ。アメリカでは銃の所有が憲法上の権利として定められていることは有名だ。しかし、アメリカ憲法は、さらに踏み込んで、住民組織が銃を持って武装し戦うことも認めている。アメリカの自治体は、そういう強い基盤の上に作られているのだ。

■アフターコロナ

アフターコロナという言葉が最近ネット上でよく見かける。新型コロナウイルスが収束した後の社会のあり方を考えようという趣旨のようだ。多様な意見が発信されている。

議論はまだ始まったばかりだし、アフターコロナの前に、感染を食い止めなければならないし、経済対策も必要だ。

しかし、大きな発想の転換をもってアフターコロナを構想することは必要だろうと感じる。

融資先紹介

(株) サスティナライフ森の家

▷ 活動分野：住宅 | 自然とつながる持続可能な豊かな暮らし |

▷ HP : <https://www.sustainalife.co.jp/>



「いま」できることから、持続可能な「未来」へと！

サスティナブル＝持続可能な循環する暮らし

ヴィレッジ＝自然に寄り添う豊かな暮らし



「サスティナヴィレッジ鳴子」

未来バンクの出資者の皆さま、こんにちは。

「株式会社サスティナライフ森の家」は国産材、くんえん加工した地域スギ材を使用し、大工の手刻みによる木組み、地域の自然素材を活かした家づくりをしている住宅会社です。

木材はもちろん、家づくりの素材それぞれの安全性、トレーサビリティにも配慮。日々の暮らしの中で五感を育む、本物の自然素材にあふれた空間をご提案しています。

今回ご融資いただきましたのが、持続可能な循環型・脱酸素型の地域協働プロジェクト。その第1弾が「サスティナヴィレッジ鳴子」です。

ここでは、森林資源の循環から生まれる木質バイオマスエネルギー源としたCHP（小型木質バイオマスガス化熱電併給ユニット）が、サスティナブルな生活を支えます。「エコラの森※」を一望できる隣接した敷地で、広大な自然に寄り添う豊かな暮らしの実現に取り組んでいきます。

今回、CHPでは地元で間伐されたスギ材をチップのまま燃料として使用。過疎化地域の木材資源の有効活用となります。そしてヴィレッジ敷地内で第一次募集により入居スタートしている自然素材賃貸アパート（2棟8室）は、地元産スギ材を使用した「板倉構法」のメゾネットタイプです。

奇しくも世の中は新型コロナウイルスの影響を、あらゆる場面で被ることとなりました。そしてこれからの未来は、この決してありがたくないモノとも共存していかなければならず、サステイナヴィレッジという取り組みは、その未来の暮らし方に対応可能と考えています。多くの会社がリモートワークを導入することとなり、今後は住む場所を通勤の利便性を最重要としなくても、好きな場所で、好きなライフスタイルで選ぶことも可能となる事でしょう。



「板倉構法」

豊かな森を守り、木を育て、風土や日々の営みを紡ぐこと。それが日本の森林をはじめとする自然環境を未来へとつなげることとなり、自然と共生する持続可能で豊かな暮らしへとつながること。

個々の暮らしがひいては持続可能な社会、コミュニティの実現へと。サステイナヴィレッジでの取り組みが、そのはじめの一歩となれると確信しています。

※エコラの森

大崎市鳴子温泉の川渡温泉地区にある260haの荒廃した森林。この「エコラの森」を中心に持続可能なハイブリッド林業を行いつつ、森林資源の有効活用する社会システムを作り、森林を育てる人材を育成し、森林を元気にする活動を行っているのが「NPO法人しんりん」。



「エコラの森」

未来バンクとは

市民が組合員となって出資していただいた資金を、環境・市民事業・福祉の目的に関して、市民やNPO団体・法人が起す社会的有用性の高い事業や取り組みに対し「融資」という方法で支援することを目的に設立された、市民による市民のための非営利バンクです。

出資者のみなさまの夢のこもったお金を通じて、想いと人をつなぎ、住みよい未来を育てていきます。

融資実績

融資累計件数：429件 融資累計額：約13億8千万円（2020年5月時点）

2020年1月～5月 融資件数：3件 融資計額：1,500万円

融資の申し込みをご検討の方は、ウェブサイト内の「融資を受ける」をご覧ください。お問い合わせをお待ちしています。

<https://mirai-bank.org/loan/>



未来バンクの趣旨にご賛同いただける方は、出資をご検討ください。詳細はウェブサイト内の「出資・応援する」をご覧ください。

<https://mirai-bank.org/investment/>



未来バンクニュースレター 第4号

発行・編集：未来バンク事務局

発行日：2020年6月



未来バンク

MIRAI BANK

連絡先：〒132-0033

東京都江戸川区東小松川3-35-13-204

市民共同事務所「市民ファーム」内

TEL/ FAX：03-3654-9188

HP：<https://mirai-bank.org/>

MAIL：info@mirai-bank.org